別に法門をさせるといったこともなく通常の紫衣檀林としての扱いをしているように見受けられ、桂昌院の言うほど祐天に対し興味を抱いていたわけではなかったようである。

このほかにも祐天と大奥を結び付ける記述は「飯沼弘経寺志」（『浄全』十九、八四一頁）に見られる。これによると、弘経寺の末寺霊仙寺四十七世智廓が「祐天上人執次を以鶴姫君御所持御守本尊厨子入御紋打敷き幡二拝領」とある。年号その他不明であるが、鶴姫（綱吉女、綱教夫人）は宝永元年四月十三日に卒しており（『常日記』）時期としては合う。どのような経緯で智廓に伝えられたかは不明であるが、祐天への信仰が桂昌院を通して大奥の女たちに広がっていた可能性を示唆するものと言えよう。

宝永元年十一月二十七日増上寺大僧正雲臥が隠退を許され、二十九日には伝通院門周が増上寺住職を拝命した（『常実記』）。そしていよいよ祐天は江戸の再命紫衣寺である伝通院へと転住するのである。

●第七節　小石川伝通院住職時代

第一項　庶民との接点

元禄十二年以来六年目にして、祐天は江戸に帰ってきた。江戸の庶民は弘経寺の人々より

もっと熱狂的に祐天を迎えたかもしれない。そしてまた、飯沼時代より記録としても多くを残した時代でもある。

何よりも檀林の住職として君臨せず決して権力におぼれず江戸の庶民と接した祐天の姿勢が、また『利益記』などから読み取れるのである。

『利益記』に宝永五年七月の話として臼屋の娘はつの得益が出る（中、四三丁）。夜な夜なはつの髪が切られ少なくなり、食事も喉を通らなくなる。それを見た親が隣の数珠屋に相談する。すると数珠屋は「師（祐天）の石原（牛島）にいませし時より慈顧を蒙るよしなれば」と言い、伝通院に祐天を訪ねた。祐天は説法ののち「女ハ是を襟かけの本尊として念仏せよとて名号一幅を玉ハリ十念を授け」たと言う。祐天は牛島時代と何の変わりも分け隔てもなく接したという逸話である。

また、今でも伝通院の墓地に祐天名号の彫られた供養塔がある。この供養塔のいわれは十方庵敬順『遊歴雑記初編』（『東洋文庫四九九』平凡社、二一七頁）に載せる。文化十年の本で、時代もだいぶ下っており、石塔の内容が十分に説明できないが大筋では史実と考えられる。その内容は、鵜飼十郎右衛門義真（石塔より）という首斬り役人の話である。あるとき、「嵯峨二尊院の釈迦如来が護国寺に於て開帳ありしかば、先祖鵜飼何某参詣して礼拝するといへども、仏体は雲霧の覆いし如くにて拝する事叶はず、鵜飼心底に己が罪障の深きを恥て、我家へ帰り、水垢離をとり、六根ともに精進潔斎し」てもその仏に雲がかかったようになっ

て礼することができなかったと言う。そこで伝通院祐天にその所業を物語り懺悔した。「祐天あはれみて、平生身につけたる袈裟と珠数をあたへけり、鵜飼忝さ身にあまり、頓て袈裟を着、彼珠数にて拝礼するに、仏体」をありありと拝することができたと言う。その後、義真は自宅に供養塔を建て、首斬した一千五百五人（石塔より）を供養したということである。

石塔と内容の合わないのは、元禄十三年七月十八日西信寺三世皓誉典恕の代のことで祐天が伝通院（宝永六年十一月十二日）に入院したときに、この地（伝通院）に移したとのことが記されている。元禄十三年と言えば、桂昌院が清涼寺の釈迦如来を請じ護国寺で御開帳のあった年である（五月十六日『常実記』）。おそらくそのときの話であり、実際には義真は西信寺の住職に相談したのち、祐天との接点を持ったのであろう。しかし、いずれにしても祐天の教化の一話として今に伝わるものである。

祐天のこの時代の事績としてもう一つ特筆すべきは、専称院の復興であろう。この話も『遊歴雑記初編』（『東洋文庫』四九九、一〇六頁）に出ている。また、現在の専称院の門前にある長夜灯の石塔にも刻まれている。詳細は『THE祐天寺』（十四、四頁）に当の専称院住職である玉山成元先生が書かれているが、概略を記すと次のようである。

祐天の牛島時代からの信者に臼倉四郎左衛門という者がいた。祐天が伝通院に住職した翌宝永二年、祐天に自分の隣地（豊島の墨田川沿い）にある地蔵堂のことを話し、そこで村の人々に十念を授けて欲しいと頼んだ。祐天は檀林主という立場にもかかわらず出かけていき

村人に十念を授けた。そして、この地蔵堂を寺にして長く念仏弘通の一助にしたいと言ったので近隣の村人も協力し、ついに宝永四年正月二十七日亀嶋山地蔵寺専称院として復興したのである。祐天は入仏供養をし、伝通院の末寺に加えたのである。

当時は「大小之新寺、為私不可致建立事」（「浄土宗法度」『増上寺史料集』一、八七頁）とあるように、幕府の許可がなければ新寺を建立することは固く禁じられていた時代であった。寺院の修復も「佛閣建立并修復等、応其寺之分際、」「私用者勿論、縦雖為寺院建立、猥不可致借金并門前屋敷質物ニ入置事、堅可為無用事、」（「門末寺院法度」『増上寺史料集』一、元禄十年、二三九頁）ということが求められていた。

しかし、祐天は念仏弘通のために、村人が資金を出すという形で復興を成就せしめたのである。村人が自ら寺院復興を発願したとも言え、祐天の偉大さが知れよう。

さらに、現在でも伝通院祐天と書された名号が多く伝えられていることが、何より当時の庶民への教化の証拠として見ることができるのである。

次は一般庶民ではないが伝通院での出来事として「小石川伝通院志」に載せる話がある。徳利小僧という話で、「毎夜八つ時頃には十二才計の小僧徳利をたゝきてこゝかしれぬ〳〵と云ありきけり」と言う。そこで祐天一人でその童僧と問答した。それ以来「出る事なし全く祐天大和尚の方便説化より多年の迷魂得脱せしそかしこけれ」と言う。

檀林志には珍しい話であるが、修行僧の間でさえこのような話が広まっていたのであれば、

その祐天の徳は町中に広まっていたことが知られるであろう。

第二項　桂昌院と祐天

祐天は前述のごとく庶民との接点を保ちながら、将軍家との関係をますます深めていく。宝永二年になると、正月二十九日に門周が、二月二十六日・四月二十一日には了也、三月二十一日に門周と祐天、四月晦日・閏四月二十五日・九月四日に門周・了也・雲臥、三月二十九日・五月十日・十月二十三日に門周・了也・雲臥・祐天、十一月十一日に門周・祐天をはじめ天徳寺、幡随院らが登城している。

増上寺の大僧正たちがこのように頻繁に奥に呼ばれるようになるのは、この年が初めてである。このように宝永二年だけでも五回祐天の登城した記録がある〔『浄土宗大年表』、『常実記』、『隆光僧正日記』（三、続群書類従完成会、昭和四十五年）〕。

この年六月二十二日、桂昌院ついに終わりのときを迎えた。『檀通書附』に臨終の様子が記されている。

桂昌尼公終焉之砌祐師登　城二有二御対顔一十念授与摂取之糸握二両手一而終焉不レ乱

［割注］貞誉僧正證誉湛誉」三僧正各列座而以称名同音已上刻即如レ入二禅定一